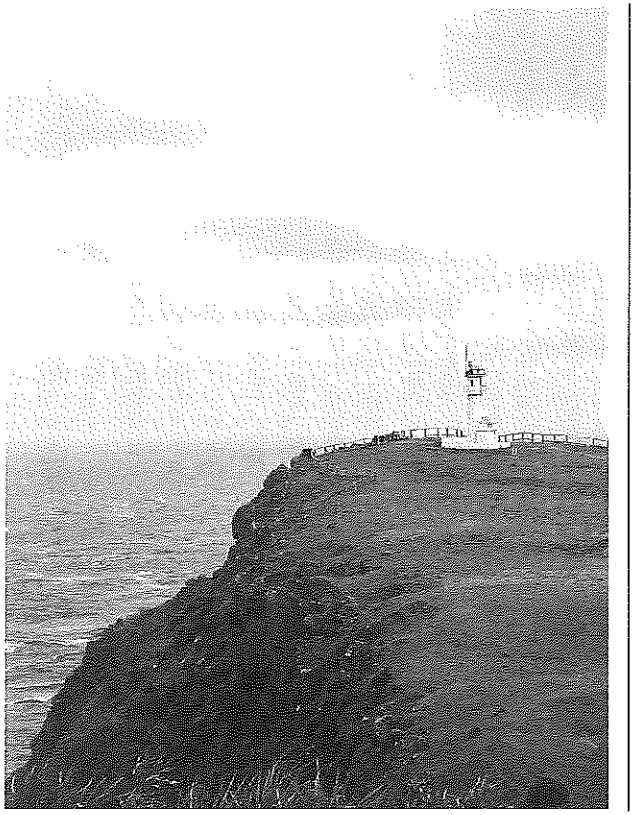
（34）『紅の豚』の中でも、多くの飛行機があつまって静かに上空へと移動していく場面がある。それも「飛行機の墓場」としての描出ではないか。スタジオジブリ『DVD　紅の豚』（一九九二年）参照。



特集　大災害と文明の転換

大震災は〈神義論〉を引き起こしたか

藤原聖子（ふじわら　さとこ）

一　〈なぜ〉地震は起きたのか
――死生学と神義論――

人は予期せぬ大災害に見舞われたとき、宗教に向かうのだろうか、それとも「神も仏もいるものか」となるのだろうか。もともと「神を信じる」という人が多い国では、災害を機に神を疑う人が出るのではないかが関心事になるようだ。それに対して、「無宗教」な人が多いといわれる日本では、三月一一日の東日本大震災の後、「人間を超えた大いなるものの存在に気づけ」というメッセージの方が前面に出ているように見受けられる。

災害と信仰の因果関係に関するこれら二つの見方は、一見正反対だが、災害という苦難の意味を問うという点では共通である。「なぜ地震は起きたのか」という問いに対する宗教的な回答。そのような問いと答えは、しばしば神義論（theodicy）と呼ばれてきた。

より厳密には、神義論は「地中の鯰が動くと地震が発生する」という類の一般法則的説明ではなく、「なぜ私は／あの人は被災したのか」という実存的な問題に属する。なおかつ、「なぜ苦しまなければならないのか」という不条理感を伴う。災害を機に、「神はいないのでは」と疑うのは、善人・悪人、幼い子ども・大人の区別なく襲う災害はあまりに残酷、アンフェアであると思うためである。他方、「人間を超えた大いなるものの存在に気づけ」とい

う発言は、それが災害に込められた神的存在からのメッセージ（警告）だという解釈を伴うならば、神義論に該当する。災害を不条理と見る人たちに、一つの宗教的な理由づけを行っているからである。

死や苦しみを前に発する「なぜ」の問いであるということでは、神義論は、近年、死生学と呼ばれる研究領域が対象としている、死の意味づけや受容の問題と連続している。だがそれに包摂されてしまうものではない。死生学は個人の死の問題に向き合うところから始まった。そのため、不治の病を告知された人、その家族がどのように死と向き合うか、悲しみや恐怖をどう乗り越えるかなどがその典型的な課題である。これに対して神義論は世界観の問題であり、またそれを私的な事柄に留めず、他者（同じ宗教の信者や、広く社会の人々）と共有したいという志向性をもっている。神義論は自分が直接被災していなくても、自分が他者と共有する信仰の体系において、災難を論理的に説明することが難しいと感じるときに発生する。神義論は自分の癒しのためというよりも、揺るがされている信仰の体系を守るため、言い換えれば神のために試みられてきたとも言える（結果的に神の存在を否定することになったとしても）。このため、弁神論とも呼ばれてきたのである。

そのような意味の神義論は、二〇世紀のホロコーストの後、ユダヤ系哲学者であるエマニュエル・レヴィナスによって「終焉」を宣告されたことがある。[1] それは、アウシュビッツで起きたことは、神の不在を証明したという意味ではない。「なぜユダヤ人は虐殺されなければならなかったのか」という問いに、「天罰だ」は言うまでもなく、「神の隠れた計らいがあったのだ」「その苦しみにも実は意味があったのだ」等といかなる形でも理由づけてしまうことは、虐殺された人々に対して余りにむごいからである。他者の苦しみはいかにしても正当化できないから、神義論は終わったと言われたのである。

ところが、実際には、自然災害の度に「これは神がもたらしたのか？　だとしたらなぜか？」と問う人たちは現在も存在している。神義論は終焉した、あるいは終わりにすべきだと言われた後でもなお神義論の問いが発せられるのはなぜなのか。それは何のために残っているのだろうか。本稿が考察するのはこの問題である。

東日本大震災に関して、死生学の対象となる「なぜ」を問う資格が第一にあったのは、被災者である。それに対して、神義論の「なぜ」の問いには、石原都知事の天罰発言も、新聞・TV・雑誌での識者の評論も、ネット上の匿名の書き込みも含まれる。それらの多くは被災者の耳には届かない「なぜ」の問いである。まさにレヴィナスが嫌悪したような神義論の問い、それがなぜ発せられるのかを考えること、すなわちメタ・レベルの「なぜ」を問うことは、学の一つの役割であろう。

二　アンケート調査の神義論

一般の人に、大災害の後に神義論の問いを示したらどのような返答があるかについては、今世紀に入ってから民間の調査団体によるアンケート調査がなされている。以下の例はいずれもアメリカの団体によるものである。

二〇〇四年一二月二六日のスマトラ沖大地震の三週間後に、調査会社GMIが、二万人（一〇〇〇人×二〇カ国）を対象とした調査結果（表1）を発表した。

東日本大震災の二週間後には、別の調査機関PRRIが、似た調査をアメリカ人のみに実施した（表2）。回答者は一〇〇八人である。

総計数値のみをあげたが、地域や宗派ごとの集計もなされている。さらには、「最近の自然災害の深刻さは、地球規模の気候変化によるものと思うか、終末の到来のしるしと思うか」「アメリカも経済難だが、日本を支援すべきか」という質問も問われている。

なぜアメリカの民間団体がこのような調査を行うのだろうか。一つには、先進国の中では宗教への帰属意識が際立って高いアメリカにおいては、人は自然災害を機に神を疑うことはあるのかという興味関心が社会内に存在しているということである。GMIの調査責任者は、「津波のようなおぞましい悲劇は理解しがたいものであり、科学が直接的原因については説明を提供しても、多くの人はなぜ津波が起きたのかについてより深い説明を求め続ける。そのような人たちに宗教はしばしば慰めとなる答えを与えている」と述べている。宗教と科学の対立に関する人々の認知を推し量るリトマス紙的に神義論

表1

質問①「大規模な被害を引き起こした南アジアの津波は、神がもたらしたものであり、宗教的な意味をもっていると思いますか」

「絶対そうだと思う」「おそらくそうだと思う」を合わせた回答者の各国内での割合（他の選択肢は「いいえ、おそらくそうではない」「いいえ、絶対そうではない」「わからない」）

マレーシア	47(%)	カナダ	16	イタリア	6
中国	28	韓国	15	フランス	5
インド	27	オーストラリア	14	日本	5
ロシア	27	ギリシャ	10	オランダ	5
アメリカ	26	イギリス	10	デンマーク	4
ブラジル	22	ポーランド	8	（ハンガリーは政府が調査を拒否）	
メキシコ	17	ドイツ	7		

質問②「南アジアの津波は、宗教に対するあなたの態度を変えましたか」

「はい、私は神にとても近づいた」「はい、私は神にやや近づいた」を合わせた回答者の各国内での割合（他の選択肢は「影響は受けなかった」「いいえ、神からやや遠ざかった」「いいえ、神からとても遠ざかった」）

マレーシア	47(%)	中国	12	オランダ	4
インド	32	ギリシャ	8	イタリア	4
メキシコ	21	カナダ	8	ドイツ	3
ブラジル	21	オーストラリア	8	フランス	3
ロシア	17	デンマーク	6	日本	2
韓国	15	ポーランド	5	（ハンガリーは政府が調査を拒否）	
アメリカ	13	イギリス	4		

http://direct-www.gmi-mr.com/about-us/news/archive.php?p=20050119

表2

①無実の人々が災難に遭うのをみると、神を疑うことがある
②神はこの世の全ての出来事をコントロールしている
③自然災害は神が人間の信仰を試すためのものである
④自然災害は神からのしるし（警告）である
⑤自然災害は、時としてその国の一部の市民の罪に対する神の罰である

	完全にそう思う	ほぼそう思う	余りそう思わない	全くそう思わない	無回答 / 無神論
①	5(%)	13	24	48	10
②	35	21	17	17	10
③	16	24	20	29	11
④	16	22	22	29	10
⑤	13	16	21	40	11

http://www.publicreligion.org/research/?id=519

の問いが使われていることが窺われる。

もう一つは、実利的な関心である。GMIはマーケティング調査会社、PRRIは宗教意識と政治の相関性を専門とする宗教意識調査会社なのである。今世紀に入ってからの大規模な異常気象と地球温暖化に関する議論の高まりを受けて、それは消費行動や投票行動にどう結びつくのか、それに宗教的信仰は影響を与えるのかを調べているのである。たとえば、PRRIの調査で③④、特に⑤に「そう思う」という人たちは、論理的には「日本に支援は必要ない」となりそうだが、そう言いきる人は全体で七%しかいなかった。

そのような関心の下でGMIが特記しているのは、日本の数値の低さである。記事は、ほとんどの日本人にとって、宗教は日常生活において大きな役割を果たしていないと説明した上で、ワシントン大学国際研究の教授による、「日本人は宗教に対してプラグマティックなアプローチをとるので、津波のような自然災害が起きても宗教に向かうことはないのだろう」というコメントを引用している。「プラグマティック」というのは現実的だから宗教に向かわないのだともとれるが、神仏に「ご利益」を求めることはあっても、実存的な問いを生むような宗教とは無縁だと言っているようにもとれる。

だが日本の数値の低さは、日本人がプラグマティックな宗教性を持っているからというよりも、質問①や②が日本人にとっては日頃なじみがなく、答えに窮したという可能性もある。そして他国の場合、スマトラ沖地震の影響を直接受けたマレーシアやインド以外の国では、自分が実存的危機に晒された人は少ない。その状況ではこのような質問を受けた時に、津波に不条理を感じ、宗教的葛藤を覚えるという典型的な神義論の結果として答えたのではなく、よくある問いに対して機械的に反応した人々も存在すると思われる。それならば、Yesの数だけでなく、なぜそう考えるのかという論理を探る必要が出てくる。

三　現代アメリカの神義論のヴァリエーション

震災後の日本の言説を分析するための比較対象として、前述のアンケート調査にみられるように、神義論を問う